



YAMANASHI

R2~R4 英語教育改善プラン推進事業【昭和町立常永小学校】



柱1:発信力の向上 柱2:言語活動の充実 柱3:パフォーマンス評価の充実

本校における英語教育の現状・課題

- ①実際のコミュニケーションの場における英語を活用する力
単元で学習したことは使えるが、既習事項を適切に用いて会話を深めたり広げたりすることができず、やり取りの継続が難しい。
- ②指導と評価の一体化
目標に対して、児童の力を適切に評価し、指導改善につなげるための仕組みが整っていない。
- ③児童と教師双方による英語使用量の不足

【出典】「英語教育改善プラン推進事業 実施計画書(令和4年度)」より

本校における具体的な取組内容

- 研究テーマ:新しい時代を担う児童の育成
~発信力向上を目指したパフォーマンス評価の工夫~
- CAN-DOリストの改良
 - 適切なパフォーマンス評価の実現に向けた課題設定・ルーブリックの模索と、指導改善・学習改善を促すための工夫
 - 言語活動を中心に据えた授業づくり

提案授業① 単元名「Let's go to Italy.」(NEW HORIZON Elementary6 Unit3)

ポイント・みどころ

本単元の目標に立ち返り、6年3組みんなで行くのにふさわしい都道府県を、お互いに伝え合う場面。前時までは、限定された少人数内で、聞き手の質問に対して答える形で自分のおすすめする都道府県について伝えた。本時は、授業の最後に行うクラス投票に向けて、主体的に相手にPRしていくことの大切さに気付き、やり取りに挑戦する時間。おすそめを伝えようと、試行錯誤するAuthenticなやり取りも見られ、この第6時と続く第7時の内容は今年一番の盛り上がりを見せた授業となった。

成果指標に基づく成果及び検証

■課題①に関する成果検証

1学期末と2学期末に実施したパフォーマンステストの評価結果で、目標達成率(b以上の評価)が2観点ともに上昇。【知識・技能】83%→97%、【思・判・表】90%→95%
発信力向上のアンケート結果で肯定意見が3年生93%、4年生94%、5年生84%、6年生83%

■課題②に関する成果検証

CAN-DOリストの完成により、目標が明確になった。各単元におけるPテストも案を提示した。これに付随したルーブリックも指導者間で共有されている。指導案に予め手立てを挿入することで指導改善に向けた視点を明示することができた。児童が学習の見通しを持てるように、振り返りカードを改訂し、毎時の目標を明記したところ、次時の目標や具体的な自身の取り組みに対する反省の記述が児童から見られるようになった。

■課題③に関する成果検証

Small Talkの実施率100%達成。授業内指示の英語使用率上昇。

今後の方向性

◎課題①に対して

会話を継続し、コミュニケーションを深めるには、リアクションの仕方もスキルとして段階的に指導し、身に付けさせていく。リアクションの指導を3年生に引き下げ、継続的に指導をしていくものとする。

◎課題②に対して

3学期のパフォーマンス結果を踏まえ、CAN-DOリストの目標やパフォーマンス課題についても再度見直しをする。ルーブリックについては、既存のものをベースに、児童の実態を見て専科、ALT、HRT及び有識者の助言を基に、随時改訂していく。

◎課題③に対して

継続して言語活動を中心とした授業を実施。



YAMANASHI

R2~R4 英語教育改善プラン推進事業【富士河口湖町立小立小学校】

柱1:発信力の向上 柱2:言語活動の充実 柱3:パフォーマンス評価の充実



本校における英語教育の現状・課題

- ①英語の大切さは理解しているものの、英語への学習意欲がやや低い。
英語が好きと回答した児童の割合は70%に留まっている。英語に対する苦手意識がある。
- ②話すこと(やり取り)において、その場で伝え合う力に個人差が大きい。
Small Talkや友達とのやり取りなどの活動で、即興的に表現する機会が不足している。
- ③既習の基本的な表現を活用して話すことに苦手意識をもつ児童が多い。
コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、どのように表現するのかを考える学習経験が必要である。

【出典】「研究指定校アンケート」より

本校における具体的な取組内容

- 研究テーマ
すべての児童が「わかる・できる」を実感できる授業の創造～「指導と評価の一体化」を図るための学習評価を通して～
- 言語活動の工夫
「世界の人々に富士山周辺の生き物の魅力を伝える」という、総合と関連させた言語活動を設定。
 - 中間指導(評価)
学級全体で児童の発表に対する感想や改善点の共有を行う。その視点をグループでの改善に生かす。
 - ICT活用・1人1台端末
JamboardやGoogleスライドを活用し、プレゼンテーションの作成、コメントの共有などを実施。

提案授業① 単元名「We all live on the Earth～河口湖に訪れる世界の人々に富士山の周りの生き物の魅力を伝えよう～」(6年) (NEW HORIZON Elementary6 Unit5)
ポイント・みどころ:児童の学習意欲を高めるために、世界の人々に富士山周辺の生き物の魅力を伝えるという言語活動を設定した。単元全体を通して、どうすれば自分が伝えたい動物の魅力が相手に伝わるのかを考え、友達との交流を通して、自分の発表をブラッシュアップしていくところが授業のポイントである。ICTを活用した中間指導の工夫もみどころである。

提案授業② 単元名「What do you want?～ほしいものは何かな?～」(4年) (Let's Try!2 Unit7)
ポイント・みどころ:先生のピザ店がさらに人気になるように、オリジナルのピザを考え、発表するという言語活動を設定した。明確な目的意識と場面設定を行ったことが授業のポイントである。子ども同士のやり取り場面では、1人1台端末を活用し、端末を操作しながら質問したり、質問に答えたりする活動を行った。意欲を高める工夫が本授業のみどころである。

成果指標に基づく成果及び検証

■課題①に関する成果検証

研究指定校アンケートを用いて、5月と12月の2回調査を行った。6年生において、英語が好き(55%→65%)、将来役に立つ(85%→93%)と顕著な増加がみられた。

■課題②に関する成果検証

単元末にパフォーマンステストを実施した。抽出児について、9月の時点と11月の時点で比較した際に、やり取りにおける表現に関して量的・質的に高まりがみられた。

■課題③に関する成果検証

振り返りカード、成果物、および授業観察を通して、相手や目的に応じて、自分が伝えたいことをどのように表現すればいいのかを考え、既習表現を用いる姿が多くみられた。

今後の方向性

◎課題①に対して

全体としては学習意欲に高まりがみられたものの、苦手意識をもつ児童がどの学年にも30%前後みられる。学習に対する不安や懸念を低減できるような成功体験の蓄積が必要。

◎課題②に対して

日常的にSmall talkを行い自然なやり取りを経験させていくことが重要である。子ども同士のやり取りのみならず、教師と子どもとのやり取りにも重点を置いた指導が求められる。

◎課題③に対して

どのような言語活動を設定するのが重要である。児童にとって伝える必然性がある活動であり、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等が明確な言語活動を設定していくことがポイントである。



YAMANASHI

R3~R4 英語教育改善プラン推進事業【韮崎市立韮崎小学校】

柱1:発信力の向上 柱2:言語活動の充実 柱3:パフォーマンス評価の充実



本校における英語教育の現状・課題

- ①児童による学習評価が、自己の学習改善に効果的につながっていない。
児童自身が授業の振り返りを、次の学習につなげ切れていない様子が見られる。
- ②「思考力・判断力・表現力等」の力に個人差が見られる。
意見を聞き、理由や感想を付け加えるなど、詳しく考えを述べる部分に差が見られる。
- ③会話をを行う際、これまでの既習事項を活用しきれていない。
会話を継続的に行うことができてきたが、「like」を用いた表現が多く、あまり既習表現を使えていない。

【出典】「英語教育実施状況調査・研究指定校アンケート・校内アンケート」より

本校における具体的な取組内容

- 研究テーマ
グローバル化に対応した子どもの育成 ~外国語における言語活動の充実を通して~
- 話すこと[やり取り]**
発信力向上のため、反応や情報の付加、Small Talk、目的・場面の設定などを意識していく。
 - 中間指導(評価)**
評価の段階を経て、良い表現を自分事として捉え、次に生かす。[Try to Challenge]
 - パフォーマンス課題・ルーブリック**
ルーブリックにおいて、目標を理解して取り組むとともに、観点ごとに自己評価していく。

提案授業① 単元名「This is my town. ~自分たちの町にあるもの、あったらいいものを伝え合おう~」(Here We Go!6 Unit6)

ポイント・みどころ 自分たちの町について会話をする際、相手の内容に合わせ、即興的に気持ちを考え、伝えていくことができた。また、児童が会話をする際、1人1台端末を用いて撮影し、中間指導の際に活用することができた。ルーブリックにおいても、評価基準の内容を児童にも考えさせることで、理解をより深めることができた。

提案授業② 単元名「What do you want to be? ~アメリカの中学生と、将来の夢を語り合おう~」(Here We Go!6 Unit8)

ポイント・みどころ ルーブリックを用いて評価基準を児童と共有するとともに、児童も自己評価し、指導と評価の一体化を図った。代表児童のやり取りや、実際にカナダの小学生とリモートでやり取りする中から、自分の会話に生かしていく部分を考えられた。また、「I can ~.」「I'm good at ~.」などの既習表現も活用できた。

成果指標に基づく成果及び検証

- 課題①に関する成果検証**
指導者が一人一人の児童に合わせたコメントを書くとともに、ルーブリックを用いて自己評価を行わせ、指導と評価の一体化を図った。9割以上の児童が評価を活用している。
- 課題②に関する成果検証**
まずは、「知識・技能」の定着を積み重ね、発展的な会話につなげた。ルーブリックでの自己評価や中間指導などから、少しずつ力を高めている。即興的な発信力もついてきた。
- 課題③に関する成果検証**
会話に関する掲示物を作成し、授業中や帯時間に活用した。また、Small Talkで様々な既習表現を取り入れ、児童に意識させた。そうすることで、幅広い会話につなげられた。

今後の方向性

- ◎**課題①に対して**
児童が、振り返りシートでの評価だけでなく、ルーブリックを用いて自己評価することで、自分の力量をしっかりと把握することができる。前向きに取り組めるような評価を行う。
- ◎**課題②に対して**
発信力向上のためには、中学年の指導も重要である。本校は低学年の授業時数も増やして取り組んだ。今後も、発達段階に合わせた指導を積み重ねることが重要だと考える。
- ◎**課題③に対して**
授業の中で、Small Talkやデモンストレーションをする際、既習事項を効果的に導入することが望ましい。授業中はもちろん、帯時間も利用し、活用することで定着率を上げたい。



YAMANASHI

R3~R4 英語教育改善プラン推進事業【山梨市立加納岩小学校】



柱1:発信力の向上 柱2:言語活動の充実 柱3:パフォーマンス評価の充実

本校における英語教育の現状・課題

①自分の考えや気持ちなどを伝え合う「言語活動」の捉えと実施(教師)

本校では、8割近くの教師が、いわゆる「やり取り」の指導を行っている。一方、授業の際の教師の英語使用頻度は25~50%、もしくはそれ以下が半数いる。教師-児童の英語によるやり取りを通じた練り上げの時間を大切にしたい。

②自分の思いを主体的に表現することの課題(児童)

約9割の児童が英語を好きと答えている。ある程度準備したことをやり取りすることができものの、準備していないことになると思うように会話ができなくなってしまうことが昨年度明らかになった。

【出典】「研究指定校アンケート」より

本校における具体的な取組内容

研究テーマ

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実におけた授業づくり
~自分の思いを主体的に表現する児童の育成を目指して~

□学習者用デジタル教科書活用

家庭学習・授業内での扱いを積極的に行い、効果的な活用方法を検討する。

□話すこと[やり取り]

相手を変えてやり取りを繰り返し内容を整理していく場を設定し、思いを伝えられる児童の育成を目指す。

提案授業① 単元名「What do you want to be?~将来の夢を家族や未来の自分に伝えよう~」(Here We Go!6 Unit8)

○個別学習と協働学習の往還による練り上げ・中間指導

個別学習では、学習者用デジタル教科書・振り返りシート等から、必要だと思われる学習教材を各自で選択し、表現したいことを整理する、表現したいことと結び付ける場を与えた。協働学習では、自分の思いをさらに引き出せるように、相手を変えて繰り返しやり取りすることを設定した。中間指導の場面では教師-児童、児童-児童のやり取りを示すことで、各自が自分の思いをさらに深めることをねらった。

成果指標に基づく成果及び検証

■課題①に関する成果検証

検証授業では、教師-児童のやり取りを繰り返し、将来の夢について児童の思いを引き出す場面を設定した。具体的な指導事例を校内で共有することができたと考える。

■課題②に関する成果検証

2学期に、教科書上で展開されているアニメに英語で音声をつける活動をした。事後アンケートによると、この活動がきっかけで、会話を続けられるようになってきたと肯定的に回答した児童が9割をこえた。情意面での前向きな変化があったことがわかる。1学期、2学期末のALTと児童との一対一やり取りパフォーマンスの様子からは、大きな変化があった児童は限られた。継続したやり取りの指導が求められる。

今後の方向性

◎課題①に対して

知識・技能面に関わる英語表現にとどまらず、内容面により一層焦点化し掘り下げていく指導を考えていく必要がある。日頃の授業から、児童-児童、教師-児童のやり取りの繰り返しによって学びを深めていけるようにするために、具体的な指導例を今後も共有し、授業に取り入れていく。

◎課題②に対して

学期に1回程度、ALT-児童のやり取りにおけるパフォーマンス課題を設定したい。さらに、学習者用デジタル教科書を家庭学習でも活用できるよう学び方の指導を続けるとともに、学校では協働的な学びによって主体的に表現できる場を多く設定したい。



YAMANASHI

R3~R4 英語教育改善プラン推進事業【南部町立睦合小学校】



柱1:発信力の向上 柱2:言語活動の充実 柱3:パフォーマンス評価の充実

本校における英語教育の現状・課題

①児童の英語による発信力

「英語の勉強が好き」と答えた児童数は増加している。(「R3・R4研究指定校アンケート」より)しかし、学んだことを活用し自ら進んで発信する段階までには高まっていない。

②CAN-DOリストの活用

本校版CAN-DOリストをR3に作成したが、活用するまでには至っていない。

③教師の英語力及び英語指導力

「進んで英語を学ぶ姿」を児童に見せるよう努めてきたが、教師自身の英語力や英語指導力向上に向けての研鑽が引き続き必要である。

【出典】「実施計画書(R4)」より

本校における具体的な取組内容

研究テーマ 『進んで学び 確かな学力をもつ児童の育成』
～英語で伝え合う力の育成を通して～

□Small Talk

教師同士、あるいは教師と児童のやり取りから児童に学習の見通しをもたせると共に、児童を巻き込むスモールトークを仕組むことで児童に既習表現に触れさせたり引き出したりして発信力を高める。

□CAN-DOリスト

教師と児童が目標を共有化するために活用。実践を重ねながら検証し見直していく。

□ICT活用・1人1台端末

デジタル教科書や1人1台端末の効果的な活用方法の研究

提案授業② 単元名「What would you like?」(Here We Go!5 Unit7)

第5学年・12月実施

- ・児童がやり取りをしたくなるような、必然性のある場面設定の工夫
- ・日々の授業でのSmall Talkの積み重ね
- ・ICTの活用

成果指標に基づく成果及び検証

■課題①に関する成果検証

パフォーマンステストの経年比較から発話量の増加が見られた。また、ALTや児童同士で積極的にやり取りをする姿から、英語を使うことの楽しさや自信が感じられた。

■課題②に関する成果検証

年度当初から計画的に活用し、児童の実態に即したCAN-DOリストの見直しを行うことができた。また、本校で作成したチャレンジリストの活用により、児童が自分のがんばりに気付き、学習への意欲づけにつながった。

■課題③に関する成果検証

理論研究や実践研究を通して、中間指導やスモールトークの活用などの英語指導力を伸ばすことができた。また、ALTと意欲的にコミュニケーションをとることで、英語力の向上が図れた。

今後の方向性

◎課題①に対して

全体的に発信力の向上が見られたが、個人差がある。学習者用デジタル教科書の効果的な活用方法を研究し、個々の力の向上を目指す。

◎課題②に対して

来年度の児童の実態に即した改訂を含め、CAN-DOリスト・チャレンジリストの活用方法の研究を継続していく。

◎課題③に対して

校内研究として来年度も英語の研究をしていくことが確認された。引き続き、英語力・英語指導力の向上に向けて研究していく。



YAMANASHI

R3~R4 英語教育改善プラン推進事業【丹波山村立丹波小学校】



柱1:発信力の向上 柱2:言語活動の充実 柱3:パフォーマンス評価の充実

本校における英語教育の現状・課題

本校における具体的な取組内容

①外国語を学ぶ意義や外国への興味・関心を高める指導の工夫

外国への興味・関心や、英語については、半数の児童が「あまりそうは思わない」と回答。児童が英語学習の意義や英語を使った活動の楽しさを感じられるような指導の工夫が必要である。

②児童の発信力の改善

校内研究アンケートから、「授業中に手を挙げて発表することが好きですか。」の質問に30%の児童が「あまり好きではない」「きらい」と回答。自信を持って、意見を言えるような場の設定や指導が課題。

【出典】「研究指定校アンケート」「校内研究アンケート」より

③CAN-DOリストの作成と活用

本校の実態に合わせて、丹波小独自のCAN-DOリストを作成し、学習指導・評価への活用が課題。

研究テーマ

自ら学び、生き生きと学習に取り組む児童の育成
～進んで考え、伝え合う力をのばすための指導の工夫～

□海外との直接コミュニケーション

令和3年度の提案授業において、オーストラリアに住むALTの弟とzoomでの交流を実施。

□児童の実態に合わせた言語活動の工夫

令和4年度の提案授業において、3～6学年合同の授業の実施。全校児童による英語活動を実施。

□CAN-DOリスト

教職員・児童ともにわかりやすく見やすい丹波小独自のCAN-DOリストを作成と活用。

提案授業① 単元名 Welcome to Japan.「日本の四季や文化を紹介しよう」(NEW HORIZON Elementary 5 Unit7)

ポイント・みどころ

・オーストラリアに住むALTの弟とzoomでのオンラインで交流 ・オンライン上でのやり取りの工夫

提案授業② 単元名 「ALTが喜ぶピザを協力して作り、紹介しよう」(3～6年合同授業)

ポイント・みどころ

・4つの異学年による交流 ・児童の実態に合わせた場の設定と言語活動の工夫 ・児童の意欲を高める単元の設定

成果指標に基づく成果及び検証

今後の方向性

■課題①に関する成果検証

アンケート結果から、英語や外国に対する関心・意欲が改善。海外に住む外国人との交流や全校児童で取り組むEnglish Timeなどの有効性を確認できた。

■課題②に関する成果検証

提案授業では、異学年交流により、児童がより生き生きと活動に取り組めた。一方、アンケート上では、有意な変容が見られず、継続的な指導が必要である。

■課題③に関する成果検証

CAN-DOリスト作成後のアンケートでは、CAN-DOリスト及びCHALLENGEリストに基づいた指導と評価について英語を教えている全職員が75%以上行っていると回答した。

◎課題①に対して

日本の文化を紹介するなどの単元において、海外との交流を継続的に行っていくことが有効と考える。オンラインが難しい場合、ビデオを撮影して見合うなどの工夫をしていく必要がある。

◎課題②に対して

平素から意見発表の機会の設定、内容の充実させていく。学校の特色を生かし、異学年、教職員、外部の人との交流する場を設けて、やり取りを充実させることで発信力向上を図る。

◎課題③に対して

丹波小独自のCAN-DOリストの作成をし、活用を進めたが、効果的な活用方法についてより深く学び、実践していく必要がある。



YAMANASHI

R2~R4 英語教育改善プラン推進事業【昭和町立押原中学校】

柱1:発信力の向上 柱2:言語活動の充実 柱3:パフォーマンス評価の充実



本校における英語教育の現状・課題

①「話すこと」に課題がある

流暢さと正確さのバランスに課題がある。令和3年度5月の「英語で伝え合う活動が行われているか」という問いに「そう思う」と答えた生徒の割合は47.5%であった。

②「書くこと」に課題がある

令和3年度5月の「自分の考えを英語で書いたりする活動が行われているか」という問いに「そう思う」と答えた生徒の割合は46.3%であった。

③「指導と評価の一体化」に課題がある

単元のはじめに、単元目標やパフォーマンステストを生徒と共有し授業を行う必要がある。

【出典】「研究指定校アンケート」より

本校における具体的な取組内容

研究テーマ

「指導と評価の一体化」に基づいた授業づくり

□話すこと[やり取り]

帯活動に取り組むことで、言語活動の機会を増やした。また中間指導により、質の向上に努めた。

□領域統合型言語活動

主に、「話したことを書く」活動に取り組んだ。

□バックワードデザインシート

単元の第1時に示し、学習の見通しを持たせた。

提案授業① 単元名 The Way to School (Sunshine 1 PROGRAM6)

ポイント・みどころ 思考力、判断力、表現力等を育成する教科書本文の活用
「読むこと」→「話すこと[やり取り]」→「書くこと」(領域統合型の言語活動)

※初見の英文における概要や要点を捉える「読むこと」の指導

※学習者用デジタル教科書を用いた個別最適な学びと協働的な学び

※動画を用いた中間指導の工夫

提案授業② 単元名 Live Life in True Harmony (Sunshine 2 PROGRAM6)

ポイント・みどころ コミュニケーションを支える言語材料の導入
コミュニケーションを支える言語材料「受け身」の導入

※コミュニケーションと言語材料(文法)の両者を統合した指導

※教科書本文と実生活のつながりによる教科横断的な指導

※言語活動と言語学習の往還を意識した指導

成果指標に基づく成果及び検証

■課題①に関する成果検証

令和4年度5月のアンケートで上記と同じ問いに対して「そう思う」と答えた生徒の割合が51.6%となり、約4%上昇。

■課題②に関する成果検証

令和4年度5月のアンケートで上記と同じ問いに対して「そう思う」と答えた生徒の割合が55.4%となり、約9%上昇。

■課題③に関する成果検証

「適切にパフォーマンステストが行われているか」という問いに対して令和3年度から令和4年度の1年間で「そう思う」と答えた生徒の割合が42.4%から48.4%と約6%上昇。

今後の方向性

◎課題①に対して

話すこと[やり取り]の活動の機会をさらに増やしたり、中間指導を充実をさせたりすることで流暢さと正確性の精度の向上につながると思われる。

◎課題②に対して

「書くこと」におけるパフォーマンステストでC評価になってしまう生徒が若干名いる。思考する必然性のある適切なパフォーマンステスト課題の設定に力を入れていきたい。

◎課題③に対して

生徒が授業で見通しを持ち、意欲的に活動できるためのバックワードデザインやパフォーマンステストの作成の研究に今後も取り組んでいく必要である。



YAMANASHI

R2~R4 英語教育改善プラン推進事業【河口湖南中学校組合立河口湖南中学校】



柱1:発信力の向上 柱2:言語活動の充実 柱3:パフォーマンス評価の充実

本校における英語教育の現状・課題

- ①具体的でかつ明確な目的意識をもった言語活動の必要性
単元を通して培うべき学習内容を生徒と教師で共有できていないのではないか。また、単元目標と類似した具体的な目的意識をもった言語活動の機会が不十分であったのではないか。
- ②既習の基本的な表現を活用し、書くことに苦手意識をもつ生徒がいる。
教科書の内容に繰り返し触れる場面や方策が必要なのではないか。知識・技能の蓄積やそれらを活用する経験が不足していたのではないか。(インプットの場面を見直す必要性)
- ③表現内容の広がりや深まりの少なさ
+αの情報を付け加えたり、相手から引き出したりするための工夫に対する指導が必要なのではないか。

【出典】「R2~R3年度パフォーマンステスト、R3年度研究指定校アンケート」より

本校における具体的な取組内容

研究テーマ

教科書本文に対する多角的で良質なインプットから、知識・技能を活用したアウトプットへ

- バックワードデザインと単元目標へのスモールステップを意識した授業づくり
生徒—教師の共通理解の元で行われる見通しをもった学習とその足場がけ／類似の目的意識をもった言語活動の繰り返し／振り返りシートの活用
- 教科書(学習者用デジタル教科書)の活用
個別最適な学び／知識の蓄積と活用(教科書本文の活用)／繰り返し読むための発問の工夫
- 領域統合型言語活動
ALTとのねらいを定めたチームティーチング／Small talkの活用／各領域を往復する言語活動／中間指導の在り方

提案授業 単元名 Work Experience (Here We Go! ENGLISH COURSE 2 Unit6)

ポイント・みどころ 学習者用デジタル教科書の効果的な活用による言語活動の充実

「読むこと」→「話すこと[やり取り]」→「書くこと」(領域統合型の言語活動)

※学習者用デジタル教科書のメリットを生かした言語活動の充実 ※即興的なやり取りにおける、ALTとの有効なチームティーチング ※目標を達成するための中間指導の在り方

成果指標に基づく成果及び検証

- 課題①に関する成果検証:研究指定校アンケート
パフォーマンステストに関する項目の肯定的回答の増加…項目14の結果から、日々の授業と単元もしくは学期末に行われるパフォーマンステストとの繋がりが生徒に明確になっていることが分かる。項目14: 2021年5月77.4%→2023年1月92.9% 項目15:2021年5月75.8%→2023年1月89.3%/振り返りシート
- 課題②に関する成果検証:研究指定校アンケート
「書くこと」に関する項目の肯定的回答の増加…項目11:2021年5月88.9%→2023年1月91.3%、項目13:2021年5月87.5%→2023年1月91.3%/単元末課題の作品
- 課題③に関する成果検証:パフォーマンス動画や作品
一例として…
・ALTの好きなものやことを聞き出し、それに合った夏休みに行くべきおススメの場所を紹介できる。
・「将来の夢」というタイトルで自分の好きなことや興味・関心のあることを関連付けたレポートを姉妹都市の中学生に送ることができる。

今後の方向性

- ◎課題①に対して
生徒が発信した英語に対するフィードバックの方法と定着に向けて
⇒「英語の勉強は好きですか?」肯定的回答の減少:2021年5月58.3%→2023年1月51.7%
※ただし、「英語の授業はよく分かりますか?」の肯定的回答は増加
2021年5月77.4%→2023年1月79.5%
⇒授業で得た力を継続して定着させていくための方法が必要
- ◎課題②に対して
学習者用デジタル教科書におけるより一層の効果的な使用方法の探究
(93.9%の生徒が学習者デジタル教科書が自身の学びに役立っていると回答)
- ◎課題③に対して
英語力に関わらず、全ての生徒に共通して実践できる指導方法の確立
⇒より多くの生徒が広がりや深まりのある内容を発信できるように



YAMANASHI

R3~R4 英語教育改善プラン推進事業【甲府市立南西中学校】



柱1:発信力の向上 柱2:言語活動の充実 柱3:パフォーマンス評価の充実

本校における英語教育の現状・課題

本校における具体的な取組内容

①英語で表現することに対するの苦手意識

「英語の授業で学習していることは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか」に対する前向きな回答は9割以上。一方で「あなたは将来、積極的に英語を使うような生活をしたたり職業に就いたりしたいと思いますか」は5割未満。「話すこと」「書くこと」とのギャップが大きいのではないかと。【出典】「研究指定校アンケート」より

②パフォーマンステストにつながる日々の授業の実施の困難

目的・場面・状況等を常に設定することの難しさ。教科書を積極的に使い、スモールステップで(パターンプラクティスを脱した)、パフォーマンステストにつながる授業の設定。

研究テーマ

自分の考えや気持ちを英語で伝え合う力の育成
～パフォーマンス課題の適切な設定とその指導と評価を通して～

□パフォーマンス課題・ルーブリック

・生徒にとってわかりやすいルーブリックの作成と提示、無理なく継続できる授業の検証。
1人1台端末録画を利用した生徒自身の活動の客観的振り返り。

□領域統合型言語活動

・「話すこと[やり取り]」→「話すこと[発表]」→「書くこと」へとつなげる活動の検証。

提案授業 単元名 A Speech about My Brother (NEW HORIZON ENGLISH COURSE I Unit6)

ポイント・みどころ 「話すこと[やり取り]」→「話すこと[発表]」→「書くこと」(領域統合型の言語活動)

※コミュニケーションを行う目的や場面、状況等の設定(相手意識のある言語活動)

※領域統合型の言語活動におけるスモールステップ(足場がけ)

※1人1台端末(ICT)の有効活用

成果指標に基づく成果及び検証

今後の方向性

■課題①に関する成果検証

・表現することへの負担感や抵抗感が軽減された。「マッピング→やりとり→発表→書く」というステップを踏むことで、伝えたいことが整理され文章を短時間で書ける生徒が増えた。

■課題②に関する成果検証

・教科書の内容に関するQAでやり取りをすることが教師と生徒の間で定着。やり取りの負担感が軽減した。
・相手意識をもつことで、事実の羅列だけではなく、自分の気持ちを伝えたり、相手に質問したりすることができた。内容面の充実に伴い会話の行き来や表現内容が増加した。

◎課題①に対して

・言語面での正確さ。パフォーマンステストにおいて、「知識・技能」でaを取ることができている生徒が少ない。(思判表aの生徒が全体の44%に対し、知技aは12%)よい間違いや起こりうるエラーを全体で共有し、帯活動ややり取りの中で繰り返し使いながら定着を図る。Can Doリストに基づいて評価基準を再考する必要もある。

◎課題②に対して

・内容や文量が充実した一方で、適切でないところでの相手に投げかける表現の出現や、マイナスの内容(否定文)で文章が終わってしまうことが見られる。文章としてのまとまりや、内容面における適切な表現内容の精選について指導・評価をしていく。



YAMANASHI

R3~R4 英語教育改善プラン推進事業【北杜市立長坂中学校】

柱1:発信力の向上 柱2:言語活動の充実 柱3:パフォーマンス評価の充実



本校における英語教育の現状・課題

- ①「論理的に思考し、表現する力」の育成
…近年の長坂中学校生徒の学力における課題の解決。校内研究を基盤とした全校体制での取り組み。
- ②即興性や会話継続能力、相手意識などのコミュニケーション能力の育成
…生徒自身の意識と行動の改革。人間的な総合力の向上にもつなげたい。
- ③教員の授業力向上
…グローバル社会を生き抜く英語力を身につけさせるための最先端の授業の徹底実践。
【出典】「令和3年度英語教育改善プラン推進事業アンケート」「令和4年度 長坂中学校 校内研資料」より

本校における具体的な取組内容

- 研究テーマ
「論理的に思考し表現する力の育成をめざした授業改善」
- パフォーマンス課題・ルーブリック
生徒の心をつかむ単元中・単元末の課題の追求。生徒の意識づけ。
 - 中間指導
単元目標達成を見据えた、毎時間の活動における中間指導の在り方の研究。
 - 領域統合型言語活動
「話すこと(やりとり)」と「書くこと」がスパイラルに展開する授業実践。

提案授業① 単元名「This Is Our School」(Here We Go! I Unit 5) ポイント・みどころ:「話すこと[やり取り]から[書くこと]へ(領域統合型の言語活動)」

- *即興的なやり取りを行うための工夫(コミュニケーションを行う目的や場面、状況等の設定)
- *中間指導の在り方(内容面・言語面・態度面におけるパフォーマンス評価)
- *教科書の内容に基づく、受容技能と発信技能を関連づけた指導

成果指標に基づく成果及び検証

- 課題①②③に関する成果検証
CEFR A1レベル以上の生徒数(3学年):令和4年度41.8%
※昨年度3年生との比較
- 課題②に関する成果検証
単元末パフォーマンス活動の記録①:会話活動記録動画
単元末パフォーマンス活動の記録②:ライティング活動の記録
生徒の自主学習の取組の様子
- 課題③に関する成果検証
「R4研究指定校アンケート(教員用)」12項目中9項目の数値上昇。

今後の方向性

- ◎課題①に対して
CEFR A1相当生徒数を目標の50%に到達させることができなかった。現在校内で実施中の他教科教員との教科横断的研究等を継続し、来年度以降の目標達成をめざしたい。
- ◎課題②に対して
生徒(特に中間層)の意識と行動により変化が見られた。2年間の実践を継続実施、さらに発展させながら、生徒自身の意識改革と能力の育成を引き続きねらう必要がある。
- ◎課題③に対して
CAN-DOリストに基づく逆算的単元設計、中間指導、領域統合型言語活動などの授業改善の手立てを「長中スタンダード」としてまとめ、次年度以降も継続したい。



YAMANASHI

R3~R4 英語教育改善プラン推進事業【山梨県立甲府昭和高等学校】



柱1:発信力の向上 柱2:言語活動の充実 柱3:パフォーマンス評価の充実

本校における英語教育の現状・課題

- ①CAN-DOリストが未整備で活用する準備ができていない
R4年度から使用するCAN-DOリストが整備されておらず、準備する必要があった。
- ②授業において、日常的または社会的な話題について、即興で自分の考えや気持ちなどを伝え合う言語活動を行っていない
R3年度第1回教員対象アンケートでは「行っている」と回答した教員が22.2%だった。
- ③英語を活用する課題を設定し、指導と評価を一体的に行っていない
R3年度第1回教員対象アンケートでは「行っている」と回答した教員が33.3%だった。
【出典】「R3年度第1回英語教育改善プラン推進事業アンケート」より

本校における具体的な取組内容

- 研究テーマ
目標と指導と評価の一体化～豊かな言語活動の実践と観点別評価～
- CAN-DOリストを作成して活用する
目的を共有し、授業と評価の計画、授業実施、振り返り等に活用する
 - 領域統合型言語活動及び話すこと[やり取り]の活動に関する実践研究
教科書を活用した思考力・判断力・表現力を育成するための言語活動の実践
 - パフォーマンステストを実施し、ルーブリックで評価する
パフォーマンス課題及びルーブリックの研究を行い、指導と評価の一体化を進める

提案授業① 単元名 Lesson 8 “The Secrets of Cup Ramen”, *World Trek English Communication I New Edition*
ポイント・みどころ カップ麺の利点について書かれた説明文を読み、情報を整理して要点や概要を捉え、得られた情報を活用して自分の意見を伝え合う授業です。カップ麺の自動販売機を設置してほしいと提案するために、学んだ表現を使いながら理由とともに伝え合います。中間指導を行うことで、より豊かに表現できるようになっていく様子をご覧ください。

提案授業② 単元名 Lesson 7 “Behind the Price Tag”, *Heartening English Communication I* (桐原書店)
ポイント・みどころ 安価で提供されるファッションについての相反する意見を聞き、段階を踏んで問題点についての情報や考えなどの要点を捉え、得られた情報を活用して自分の意見を伝え合う授業です。安価な服を買うことに賛成する立場で、安価な服のadvantagesと高価な服のdisadvantagesをペアやグループで話し合い、表現活動につなげていきます。

成果指標に基づく成果及び検証

- 課題①に関する成果検証
英語担当教師全員が学習指導要領をもとに作成したCAN-DOリストを使って、目標を確認し、指導と評価を計画し、実践した。定期的に振り返りを共有し、活用することができた。
- 課題②に関する成果検証
授業において、即興で自分の考えや気持ちを伝え合う言語活動を「行っている」と回答した教員が100%に伸び、生徒の76.0%が「行われている」と回答した。
- 課題③に関する成果検証
英語を活用する課題を設定し指導と評価を一体的に「行っている」と回答した教員が100%に伸び、生徒の83.7%が授業で取り組んできたことが生かされていると回答した。
【出典】「R4年度第2回英語教育改善プラン推進事業アンケート」より

今後の方向性

- ◎課題①に対して
今後も英語担当教師全員でCAN-DOリストを使って話し合い、目標の共有、改訂を行う。生徒にも目標、授業、評価のつながりを明示して「できるようになる」ことを意識させたい。
- ◎課題②に対して
聞いたり読んだりしたことをもとに考え、判断し、表現する活動を授業に計画的に組み込むことで領域統合及び豊かな表現活動につなげる。言語活動の研究を協力して行いたい。
- ◎課題③に対して
学習指導要領、教科書、CAN-DOリストに基づいて、年間指導計画を立て、定期試験ごとに何を評価するかを決めてパフォーマンステストを実施する。ルーブリックについては妥当性・信頼性のある評価ができるようにして、さらに研究を積み重ねていきたい。



YAMANASHI

R3~R4 英語教育改善プラン推進事業【山梨県立富士河口湖高等学校】



柱1:発信力の向上 柱2:言語活動の充実 柱3:パフォーマンス評価の充実

本校における英語教育の現状・課題

①発信力の向上

英語が好きではない生徒が約6割おり、失敗を恐れるあまり自ら積極的に発信できない。

②パフォーマンス課題の実施内容と頻度

各学年におけるパフォーマンス課題が話すこと[発表]や書くことに偏っている。

③授業に関する情報共有

教科会議等で授業に関する情報共有を日常的にし、学年の垣根を越えた授業改善の検討が必要。

【出典】「研究指定校アンケート及び英語教育実施状況調査」より

本校における具体的な取組内容

研究テーマ

言語活動(話すこと[やりとり])の充実 ~授業を「デザイン」する~

□話すこと[やりとり]

教科書で学んだことを活用しながら、理由や例示を用いて意見を伝え合う。

□パフォーマンス課題・ルーブリック

目的や場面、状況を設定し、実際のコミュニケーションに沿った内容を検討する。

□小中高連携

周辺の小中学校との連携のみならず、校内での情報共有や教材・授業の在り方を共有する。

提案授業① 単元名「Lesson 8 “Edo: A Sustainable Society” LANDMARK Fit English Communication II」

ポイント・みどころ

- ・本文の概要についてALTとJTEが実際に話している場面を聞かせることで、内容について「予測」を働かせるとともに、初見の問題(聞くこと)についてその概要を捉えることができるかを問う形になっている。
- ・本文で扱っている江戸時代におけるリサイクル事情(「持続可能な社会」の実現に向けての取り組み)を、パラフレーズを用いて学んだうえで、現代ではどのような形で品物(衣服や紙)が再生利用されているか、あるいはされるべきかを、教員とのやりとりや生徒間のやりとりを通して話し合う。

成果指標に基づく成果及び検証

■課題①に関する成果検証

英語の勉強は大切だと思っており、将来に役立つと考えている生徒が9割以上いるにもかかわらず、英語が好きなのは3割程度に留まっている。しかし、言語活動の頻度は着実に高まっている。

■課題②に関する成果検証

パフォーマンス課題の目的や場面、状況の設定については、かねてより各学年で検討されてきたが、本事業を通して、やりとりを含む「話すこと」の割合が以前に比べて高くなった。

■課題③に関する成果検証

本事業を通して、英語科内の情報共有が今までより盛んになった。さらに、研究指定校アンケートの結果より、英語教育に関する連携も盛んになった。(1.~3.の項目の合計が3倍近くUp)

今後の方向性

◎課題①に対して

自分の考えや気持ちを、目的や場面、状況に応じて話す機会が増えてきているので、それらの言語活動を通して、生徒に英語の有用性を理解させ、自信をつけさせるような指導が必要である。

◎課題②に対して

パフォーマンス課題の設定自体については、よく検討されているものの、新しい評価の形についてはまだ浸透していない部分もあるので、積極的に情報共有を図っていく。

◎課題③に対して

本事業を一過性のものにならないために、今後も各種研修等で学んできたことを教科会議などで共有し、自身の授業に反映していく。また、近隣の小中学校との連携を絶やさない。